

第30回国際音楽祭 ヤング・プラハ チェコと日本で 30周年記念コンサートを開催

文：岩崎淑（ピアニスト）



岩崎淑 (Pf)・篠原悠那 (Vn)・笹沼樹 (Vc) による
メンデルスゾーン《ピアノトリオ第1番》

1992年に創立された国際音楽祭ヤング・プラハは今年30周年を迎え、



コリンでの葵トリオの演奏

チェコと日本で記念コンサートが開催された。

チェコではコロナ禍で開催が危ぶまれたが、9月後半の会期中はコロナ感染が落ち着き、予定通り15回のコンサートを開くことができた。日本からは葵トリオ、チェコの岡本侑也さんはドイツから留学中のピアノの松土優衣香さん、オーストリアからファゴットの山田哲朗さんが参加された。入国規制が発動されている中、コンサートに支障のないよう到着し予定通り演奏して下さったが、それぞれ工夫されたことだろう。この2年、多くの演奏会がキャンセルされてきた中、待ちわびたコンサートとあって、どの会場も30周年を迎えたヤング・プラハを祝う音楽

愛好家で満員となり、国際音楽祭ヤング・プラハにふさわしい晴れやかな雰囲気での演奏会ばかりだった。

葵トリオは創立時からご支援いただいているトヨタ自動車の工場があるコリン、チェコ国民音楽の祖スメタナの生誕地リトミシュル、そしてプラハで計3回の演奏会を開いた。リトミシュルではコロナ禍の中、遠く日本から訪れてくれたピアノトリオを歓迎し、市長、前市長、ギムナジウム校長、スメタナ音楽祭総裁など街の幹部が迎え、世界文化遺産のリトミシュル城内バロック劇場を葵トリオの演奏のために用意してくれた。築400年経つ木造の劇場は音響効果が素晴らしく葵トリオの演奏をみんなで満喫した。ファイナル・コンサートは例年通りプラハの音楽の殿堂、ルドルフ・ヌムンドヴォルザークホールで開かれた。岡本侑也さんは6年ぶりのヤング・プラハ出演で、ドヴォルザークのチェロ協奏曲を弾いた。ドヴォルザーク自身が何度も演奏したこのホールで、代表作チェロ協奏曲を聴けるのはなんと幸せなことか。会場にはドヴォルザークのご子孫一家もいらつしやり岡本さんが紡ぎ出す美しいチェロの音色に会場全体が至福の時を味わった。30周年にふさわしいファイナル・コンサートであった。翌日、ドヴォルザークさんのお招きで大作曲家が晩年20年を過ごした数々の名曲を世に出したヴィー・ルサ

ルカを訪問した。岡本さんは作曲の部屋、机、ペン、直筆のスコアを見て、ドヴォルザークへの想いをさらに深めたのではないだろうか。

11月7日、東京のサントリーホール・ブルーローズで国際音楽祭ヤング・プラハ創立30周年記念演奏会「ELOGIO」が開かれた。品川ジュニア・ストリング・オーケストラ、ファゴットの古谷拳一さん、ヴァイオリンの辻彩奈さん、中村友希乃さん、ピアノの桑原志織さん、阪田知樹さんが演奏して下さった。私はクアルテット・アマール・ビレのヴァイオリンの篠原悠那さんとチェロの笹沼樹さんとトリオを組んで演奏させていただいた。全員、プラハの音楽祭に参加された方たちで、この30年間に日本から出演したソリストは120名を数える。演奏家として足を踏み出した頃、プラハという中世の空気を今でも残す都で、大音楽家たちが活躍した昔のままの舞台で演奏した体験が彼らの心にしみ込み、クラシック音楽への理解を深めることになったとすれば、まさにそれは我々がこの音楽祭に込めた願いである。コンサートは3部13曲、途中にチェコ本祭の模様をダイジェスト版にしたビデオを入れてチェコからの挨拶とした。日曜の午後、3時から7時まで、国際音楽祭ヤング・プラハの若々しい力に溢れた空気に支援者の皆様に存分に浸っていた。